桜麗華学園謎解き部?

覇王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜麗華学園謎解き部？

【Ｎコード】
Ｎ０１３５ＢＡ

【作者名】
覇王

【あらすじ】
「桜麗華学謎解き部」…それは、日々謎で溢れているこの世の謎を解明し、あわよくば自分達の名を世界に知らしめてやろうとする部活。美少女、美幼女、男の娘、その他諸々の笑いあり、ラブコメありの部活重視？の学園生活が今始まる？…

【第1話】プロローグで謎解き？

チュンチュンチュン。
雀の鳴き声が耳に心地好く響き、空も雲一つない快晴の、清々しい朝。
今日も気持ち良く新しい一日を始められそうだと思っていると……

「お兄ちゃーん」
「優羽くーん」

下の方から、今日は曇り空だったのか？と、一瞬思わせてしまうような雷鳴のような足音が徐々に大きくなりながら聴こえてきた。
最初に、と言ってもほぼ同時なのだが香茱弥（かぐや）　優羽（ゆう）こと高校生にしては低めな背丈だが、黒い艶髪は女の子のように長めに伸ばした、道を歩けば女の子と見間違えられるような男の娘の僕を呼んだのは、黒い艶髪を肩甲骨まで伸ばしたセミロングに、小さく控え目ながらも女の子らしく出ている所は出ている、背は少し小さめの美幼女の香茱弥（かぐや）　心愛（ここあ）。そして、次に呼んだのが黒い艶髪を腰の辺りまで伸ばしたロングに、調度手に収まるサイズの胸の女子高校生としては平均より少し高めの美少女の香茱弥（かぐや）　茜（あかね）だ。
二人共、街を歩けば恐らく振り向かない男はいないだろう、誰もが認める美人姉妹だ。

「朝だよー」
「朝ですよー」

勢い良く扉が開かれ二人の女の子が口々に自分を起こしにきた。

「うん、二人共おはよう」

そう二人にまだ眠い目を擦りながら挨拶を返すと、二人はお互い何故か睨み合っていたので僕が、

「二人共どうしたの？」

と聞いてみると、

「お兄ちゃんは私が起こしてあげるんだから、お姉ちゃんはついて来ないでよ！！」

「そんな決まりないでしょー！優羽くんは私が起こしてあげるのー！！」

と、二人は誰が僕を起こすかで言い争っていた。

「はいはい、二人共その位にしてご飯を食べよう？どっちが僕を起こすかはまた今度でも決められるんだから」

僕が何も言わなかったら、二人の喧嘩？言い争いは終わりそうにないので止めに入った。

「ん～、お兄ちゃんがそう言うなら」

「ん～、優羽くんがそう言うなら～」

二人は口を揃えて渋々言い争うのを止めた。

僕はそれを、仲が良いのやら悪いのやら、と心の中で呟きながら聴いていた。

【第1話】プロローグで謎解き？（後書き）

この【第1話】プロローグで謎解き？…と【第2話】登校で謎解き？…は何れ改稿する予定ですm（＿＿）m

【第2話】登校で謎解き？

「「「行ってきまーす」」」

三人は口々にそう言い、ちゃんと家の戸締まりを確認して家を出た。
みんな桜麗華（おうれいか）学園の生徒で、今は学園に行く途中である。

桜麗華学園は、街の中心地から少し離れた小高い山の上にあり、小学生が在籍している初等部、中学生が在籍している中等部、高校生が在籍している高等部に、桜麗華大学という大学もある。なので、敷地面積は誰もがここは学校かと一度は疑ってしまうくらい広い。
この学園は全てエスカレーター式で、初等部から大学まである程度の学力を身に付けていれば進級又は進学をすることが出来る。そして、学園内では普通の一般家庭の生徒を集めたクラス、世間一般から天才と呼ばれる才能を持った者を集めたクラス、そして超一流のお金持ちしか入ることの出来ないクラスがある。校舎は超一流家庭で育った御曹司、お嬢様に合わせて何から何まで超豪華な造りになっている。

本当にこの学園は何から何まで凄いと思う。
そんな、小高い山の上にそびえ立つ学園までの坂道を、心愛と茜と歩いていると、

「よっ、優羽おはよー」

背が高く、スタイリッシュな体型をした、金髪の男が話し掛けてきた。

「うん、煉夜おはよう」

彼の名前は鳳（おおとり）煉夜（れんや）。性格は、誰にでも話し掛ける、気さくで人当たりの良い人だ。

「煉夜さん、おはようございます」

「煉夜くん、おはよう」

心愛と茜も挨拶をした。

「お前は今日も美少女二人に囲まれて……

正に両手に華だな。あっ、美少女三人か」

「む～、僕は女の子じゃないよ。男の子だよ！！」

女の子と言われた優羽は、頬を膨らませて怒りを表にする。しかし、それは逆効果だったらしく、二人のやり取りを見ていた心愛と茜は、

「きゃ～、お兄ちゃん可愛い～」

「きゃ～、優羽くん可愛い～」

と、男の子にとっては褒め言葉なのかどうか危ぶまれるような事を言い、優羽に一斉に抱き着いた。

「も～、二人共こんな所で抱き着かないでよ！！」

優羽は、そんな二人に顔を少し紅潮させながら言った。

「だって、お兄ちゃんとっても可愛いんだもん」

心愛が抱き着いたままそう言うと、

「うんうん、優羽くんったら頬をぷっくり膨らませちゃって」

茜も同感と言わんばかりに言った。

「だからってこんな所で……」

半ば諦め気味に、二人に文句を言おうとしていると、途中から心愛が左側を、茜が右側の頬に頬擦りをしてきた。密着しているせいか、胸やら何やらも当たっており、優羽は顔が真っ赤だ。

この光景を見ている通学中の生徒は、

「きゃ～、あの三人抱き合って可愛い～」

「あいつら百合なのかー。誰か一人、俺に分けてくれー」

などなど、黄色い喚声やら、嫉妬のような叫び声を多々あげている。周りの生徒達からも、注目を浴びてしまっているこの光景に、流石にまずいと思った優羽は、

「二人共、そろそろ離れて！！」

騒動の収拾に努めようとするも、

「あと、少しだけ～」

「もう、優羽くんったら照れちゃって～」

と言い、離れようとはしなかった。この後も5分くらい抱き着いており、煉夜が早くしないと遅刻だぞ、と言うまで離れなかった。

そして、遅刻ギリギリの時間に、桜麗華学園の敷地内に足を踏み入れるのだった。

【第3話】幼馴染で謎解き？

優羽と煉夜が自分達の教室である普通科のＡクラスに着くと、此方に気づいたようで、足早に近づいてくる女生徒が居た。

「やっほー、優羽…と、ついでに煉夜もおはよー。」

元気いっぱいでいかにも運動が出来ます！という感じで、髪をポニーテールにした黒髪黒瞳の彼等幼馴染三人の中で唯一の女子？の楠條（なんじょう）蘭（らん）だ。

「蘭、おはよう。」

「お菓子に付いてくるちょっとしたおまけみたいに言うんじゃねーよ。」

普通に挨拶された優羽は笑顔で挨拶を返したが、変な風に言われた煉夜は少しご立腹のようだ。

「あははー、まぁいいじゃない。」

「良かねーよ。大体な、お前は毎回毎回何なんだ。いつもいつも変な挨拶しやがって。好い加減にしろよな、この微妙乳女？」

「何よ、微妙乳女って？丁度良いサイズって言いなさいよ。この位の方が手に収まって良いのよ？」

「はっ、胸なんて大きい方が良いに決まってんだろ。バーカ。馬ー鹿。」

「馬鹿はそっちでしょ？只胸が大きければ良いってもんじゃないのよ。ね、優羽も手の平にすっぽり収まる様な丁度良いサイズの胸の方が良いわよね？」

毎朝恒例としてクラスの皆に認知されつつあるやり取りをいつもの様にしていると、心の片隅に置いといて他の生徒にも挨拶のラリーをしていると、急に蘭に話を振られたので驚いた。それも、胸の話となると余計返答に困る。

「え～と…やっぱり人それぞれじゃないかな？」

優羽は一番当たり障りがが無いような言葉を選らんで言ったつもりだったが、蘭はその答えが気に食わなかなったらしく、

「ちょっとそれどういう意味？優羽も煉夜と同じで大きい方が好きだから、そんな曖昧な返答しか出来ないの？」

「いや、えーっと、そう意味じゃなくてね、僕は只純粋に…。」

好きな胸の大きさは人それぞれだと言おうとした時、隣で優羽達のやり取りを見ていた煉夜が、

「ほらな、やっぱり胸は大きい方が良いんだよ。お前みたいに微妙よ・り・な。」

「そんな事は…。」

蘭が何かを煉夜に言い返そうとした時、ＳＨＲの始まりを意味するチャイムとクラスの担任の先生が入ってきて、朝の恒例行事となりつつあるそれは、終わりを告げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0135ba/

桜麗華学園謎解き部?

2012年1月2日10時49分発行